

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.270

6-7

June & July 2025

特集

02

なぜ弦楽四重奏なのか ～カルテット AT 水戸 第3回演奏会～



06 ウィーン少年合唱団 “天使の歌声”

08 INFORMATION

水戸芸術館
ART TOWER MITO

カルテット AT 水戸 インタビュー 第3回演奏会に寄せて

聞き手:角増 柊



——今回のプログラムを選んだ経緯や意図をお聞かせください。

川崎洋介:去年にリハーサルをしていたとき、みんなで休憩している間に、来年は何を演奏しようかという話になって、いわゆる“名曲”を演奏しようという話になりました。そのなかで「このカルテットでは〈ラズモフスキー第1番〉をまだ演奏したことがないので、ぜひチャレンジしよう!」という意見が出たのがきっかけです。

柳瀬省太:カルテット AT 水戸は、まだ知られていない優れた作品を紹介することも大切にしていて、「現代曲を必ず1曲入れよう」というコンセプトもあります。

川崎:過去2回の演奏会ではアジア圏の男性作曲家の作品を紹介したので、今回はロシアの女性作曲家アウエルバッハを選びました。ハイドンはたしか、ゆかさんからのリクエストがあったような気がします。

西野ゆか:たしかに。私が「もっとハイドンとかモーツァルトの作品も演奏したいね」と言ったかもしれない。洋介さんの弾くモーツァルトとかハイドンも聴いてみたいと思って。

川崎:そこで、ハイドンの作品番号33(編集注:〈ロシア四重奏曲〉と呼ばれる全6曲からなる弦楽四重奏曲集のこと)のどれにしようかと担当の学芸員さんにも相談したら、チャーミングな終わり方をする〈冗談〉がいいんじゃないかという話になりました。アウエルバッハの作品が特にダークな雰囲気なので、プログラム全体のバランスも取れるかと思いました。

——第1回・第2回と演奏はもちろん、トークについても大好評をいただいています。トーク付きの演奏会の魅力とは何でしょうか。

川崎:そういえば、ゆかさんはいつも弦楽四重奏のコンサートでトークをしていますか?

西野:いつもしているわけではなくて、トークをお願いされるコンサートや、アウトリーチ活動などではトークしています。今は日本でも、コンサートホールでの演奏会をトーク付きで行うというのが、割と普通になってきたと思います。

柳瀬:たしかに、増えてきていると思います。でも自分で言うのもなんだけれど、カルテット AT 水戸のトークは

“しゃべり”がおもしろい。僕の場合はその“しゃべり”が、本番になると弱いんだけど……(笑)。このメンバーには何と言うか、お客さんが興味深く感じてくださるような話術があったりするんじゃないでしょうか?

川崎:そういえば、このあいだカナダの大学で開催された演奏会で、最初にちょっとトークをしました。そのときの感想なのだけれど、やっぱりクラシックの演奏会では、僕たち演奏家だけではなくて、お客さんも緊張していると思います。そこでトークが効果を発揮するのだけれど、そのときの内容は曲の解説などでなくてよいと思う。そういうことは、誰でも探せば読める時代になっています。そうではなくて、自分たちが今日弾く音楽に対してどういう思いを持っているのか、たとえば「なんで自分たちはこの曲が好きなのか」とか「なぜこの曲を選んだのか」とか、そういった話題でトークをするほうが、演奏会自体にも興味を持てたいただけるのではないのでしょうか。

——弦楽四重奏という編成ならではの、おもしろさやむずかしさというのは、どこにありますか?

川崎:心理学的なことはよくわかりないけれど、なぜか「4人」だといきなり難しく感じたりすることがあります。どうしてだろう。5人・6人いると割と簡単に音程をとったりアンサンブルを整えたりすることができるし、逆に3人で演奏するときもそれほど難しくは感じない。なのに、どうして4人になると難しく感じるんだろう。

柳瀬:作曲家がすごく気合いを入れて、とか、精密に作品を書いているから、弦楽四重奏っていくら練習しても

終わりが無い。「これでできた!」という達成感のようなものがなかなかなくて、やればやるほど終わりがなくなってくるようなところが、弦楽四重奏ならではのおもしろさでありむしろささだと思えます。

西野:それから、これはどの分野でも同じことなのかもしれないけれど……同じ曲を演奏しているのに、4人のうち1人の演奏者が交代しただけでも、音楽のテイストがガラッと変わるということも、演奏者にとってもお客さんにとってもおもしろい部分なのではないかと思えます。辻本玲:確かに、たとえばブラームスの弦楽六重奏曲とかを弾くときのことをイメージしてみると、弦楽四重奏と比べて、もう少しその場の雰囲気なども楽しみながら弾ける気がするけれど、弦楽四重奏は本当に“集中力MAX”で弾かないとうまくいかないとか……。ちょっとでも音やリズムが外れたりすると、アンサンブル全体にものすごく大きく影響しちゃうのは弦楽四重奏だと思います。すごくシビア。

柳瀬:だから、「みんなで1つのものを作る」というおもしろさは、やっぱり弦楽四重奏ならではののかもしれません。

川崎:弦楽四重奏はハイドンから始まって、それをベースにモーツァルトやベートーヴェンが発展させたことで、たくさんの充実した作品が生まれたジャンルなわけですが、カルテット AT 水戸のメンバーで演奏するならば、4つのパートが平等にチャレンジをする部分がある曲だと、それぞれの個性が出ておもしろそうです。

辻本:モーツァルトまでは「メロディー1人に対して和声の一員3人」のような部分も多いけれど、やっぱりベートーヴェンになると声部が割と独立して動き出すので、もうちょっと複雑になってきて、そういう意味でも音楽づくりとしてはすごく楽しくておもしろいです。

——水戸の街の印象を教えてください。

川崎:僕は昔から水戸室内管弦楽団で弾いているから、馴染みのある土地だと感じています。水戸のみんなも僕のことを覚えてくれているのかなと思うことがあります。やっぱり、演奏会に来てくれたお客さんの顔を舞台から見たときに、ポツポツと10人ぐらい「ああ、あの人がいた、この人がいた」と知っている顔を見つめられると、うれしい気持ちになります。

西野:第1回の演奏会のときから思っているのですが、お客さんの雰囲気が、弾く前から本当にあたたかいです。演奏会の最中も、1曲1曲弾くたびにどんどんホールの熱量が高まっていくとか。そういう気持ちを感じると素直にうれしいし、テンションも上がります!

柳瀬:茨城県は魅力度ランキングがどうとか言われているみたいだけれど、僕たち音楽家から見れば、水戸は世界的な音楽都市。東京に負けない“音楽の街”だと思います。水戸室内管弦楽団にはすごい人たちが集まってくるし、世界でも有名な人が芸術館でコンサートを開いているし……「水戸でコンサートを開けるなんて、すごいね!」と思っている音楽家は、僕たちだけではないと思います。

辻本:第1回も第2回もお客さんがすごくあたたかい。芸術館のこれまでの積み重ねのおかげなのか、お客さんも“いい音楽”というものに馴染んでいるような感じがします。お客さんから期待される水準が高いです。こういう、音楽を楽しむ土台が育まれている都市で演奏会を開けるのは、本当に恵まれていると思います。

——最後に、皆様へ向けてメッセージをお願いします。

西野:水戸での演奏は3年目になりま

す。毎年、お客さんとの関係を年々築き上げているというか、積み重ねているぞ、という気持ちで演奏させていたでいます。今年はまた一歩距離が縮まって、メンバーやホール、お客さんという関係になっていくのかなというのがすごく楽しみです。こういう距離感のようなものを一緒に感じていただきたいです。〈ラズモスキー第1番〉は大曲なので聴いていただくのも大変だとは思いますが、一緒に山を登っていくというか、音楽を通じて旅をして頂点に達する感覚を味わえたらと思っています。

川崎:お客さんとの「信頼感」を大切にしたいと思っています。信頼感というのは、メンバー同士のアンサンブルでもオーケストラと指揮者の間でも大切なものですが、やっぱりお客さんとの信頼感があると、よいコンサートにつながるのではないかと思います。なので、水戸のお客さんたちにも僕たちカルテット AT 水戸を信頼していただけたらうれしいし、僕たちも水戸のお客さんのことを信頼しながら、よりよい演奏を届けていきます。

柳瀬:「今年もまたやってきました」「皆さん、ただいま!」という気持ちで今年も水戸に行きますので、楽しんでいただけたらうれしいです。1年に1回の演奏会ですから、「水戸の街のカルテットといえば僕たち」という思いを大切にしていきたいと思っています。

辻本:過去2回の演奏会にもたくさんのお客さんに来ていただいて、とてもうれしかったです。2回目までは、弦楽四重奏が物珍しくて来てくださったたり、どんな様子か一度見てみようという方も多かったと思うのですが、3回目からは本当にいい演奏をお届けしないと、お客さんもリピートしてくださらないと思います。なので、頑張ります!!

(2025年3月14日 Zoomにて)

弦楽四重奏の魅力とは

文：角増 柊

なぜ弦楽四重奏なのか

「弦楽四重奏」を百科事典で引いてみると、使用楽器や歴史的背景についての説明がひととおりなされた後に、「すべての室内楽中、最も理想的な形態」「室内楽の王者としての地位を占めた」「最も調和した、表現力に富む組合せ」といった記述が続きます。故小澤征爾前館長も「クワルテット（弦楽四重奏）は、ソロとオーケストラとを問わず、弦楽器奏者のすべての基本」という信念をお持ちだったそうです。

「歴史的にそういうものです」「そうして発展してきたのです」と言われてしまえば、それまでです。けれども、クラシック音楽にはオーケストラや各種室内楽、混声合唱などさまざまな編成があるというのに、いったいなぜ弦楽四重奏がそこまで別格なものとして扱われ、確立から250年以上経った今なお人々の心を惹きつけるのでしょうか。弦楽四重奏の歴史や技法などの王道的な解説は音楽辞典に任せて、あえて音楽の専門用語や知識とはあまり関係のない話題を糸口に、いわば変化球でその魅力に迫ってみましょう。弦楽四重奏やクラシック音楽にあまり触れる機会のない方々にも、弦楽四重奏の魅力について考えるきっかけをお伝えできましたら幸いです。

ヒトが同時に聞き分けられる音の数

たとえば、オーケストラの演奏を聴いて「音が多すぎてよくわからない」と感じたことはありませんか。オーケストラを聴くのに慣れていたり、音楽教室などで特別な訓練を積んでいたりすれば、話は別だとは思いますが……。もしモーツァルトのような天才ならば、全部で9パートから成る曲の演奏を1・2回耳にただけで聞き分け、記憶を頼り

に楽譜を書き起こせるのでしょうか（これは、アレグリー作曲〈ミゼレーレ〉に関する逸話です）。あるいは、聖徳太子のような君子ならば、10人の話を一度に聞かされても、完璧に理解して的確な答えを返すことができるのでしょうか。

では、一般的に、ヒトは一度にどれだけの音を聴き分けられるのでしょうか。すなわち、同時にいくつの情報を認識・処理することができるのでしょうか。古くは1956年に、ハーバード大学の心理学者ジョージ・ミラー教授による研究において、人間が短期記憶に保持できる情報の数は「 7 ± 2 」チャンク（チャンクとは、人間が知覚する情報のまとまりのこと）、つまり5〜9個だとされています。ただし、この説に該当するのは、日常的なもののみだそうです。2001年には、ミズーリ大学の心理学教授ネルソン・コーワン氏が、人間の短期記憶の限界数は「 4 ± 1 」チャンク、つまり3〜5個とした研究を発表しています。この「 7 ± 2 」「 4 ± 1 」は、マーケティングの分野などでは「マジカルナンバー」と呼ばれ、現代ではとくに、後者の「 4 ± 1 」の法則を中心として、チラシやWebサイトのデザイン作成、ブランディング戦略などにも応用されているそうです。

眉唾モノに思えるかもしれませんが、「 4 ± 1 」は意外と身近なものにも登場します。たとえば、郵便番号。3100063だと少し覚えづらいかもしれませんが、310-0063のようにハイフンを入れて、数字を3つと4つに分けてみるとどうでしょうか。電話番号も同じく、0292278118より029-227-8118と分けて書くほうが、たしかに覚えやすそうです。図らずも「4人それぞれが音を出す」という弦楽四重奏の特徴からも、この説を帰納することができま

す。ひょっとすると、18世紀のヨーロッパの多くの聴衆や作曲家たちも「このくらい数がちょうどいい」と思っていたおかげで、弦楽四重奏は今日まで生き残ってきたのかもしれません。

人間は選択肢が多すぎると選べない

続いては、1995年にコロンビア大学のシーナ・アイエンガー教授が発表した「ジャムの法則」をご紹介します。これは「選択肢が増えると、逆に選ぶのが難しくなる」という現象を心理学的に明らかにした研究で、その特性から「決定回避の法則」とも呼ばれているそうです。実験の舞台は、スーパーマーケットに買い物に来たお客さんへのジャムの試食販売。試食コーナーを2グループに分け、片方には24種類のジャムを、もう片方には6種類のジャムを用意して、それぞれの試食をした人数と購入率を計測しました。すると、試食をした人数は24種類グループのほうが多くなりましたが、購入率は6種類グループのほうがなんと約10倍も高かったそうです。ここからは私見ですが、数が少ない方の試食コーナーに用意されているのが6種類だというのが、なかなかニクい設定に思えます。1種類や2種類しか用意されていないと、そもそもあまり選択の余地がないので、あれこれフレーバーを選べる楽しさを味わうというよりは、せいぜい「今、ジャムを買うか買わないか」を選べるくらいでしょう。

さて、この法則を音楽に当てはめて想像してみます。あまりにたくさんの楽器やパートのある曲だと「何を選んで聴けばいいのか」がわからず、結局は聴くこと自体をあきらめてしまう。あるいは、楽器はパイプオルガンのみだったとしても、それぞれのパー

トが複雑に入り組むフーガをどこがメインの音なのか探りながら聴くよりは、いわゆる“メロディーと伴奏”のような書法の曲のほうが、リラックスして聴ける。かといって、校歌斉唱のように全員が同じパートを演奏しているというのも、予定調和な感じがしたりスリルに欠けたりして、どこことなく物足りない……そんな思いをした経験はないでしょうか。

弦楽四重奏の音の数は、脳にとって多すぎず／少なすぎず程よく刺激的だといえましょうか。全員で一斉にジャンと和音を鳴らすシーンであっても、メロディー+ハモリ+バックিং+ベースのようにそれぞれがバラバラの役割を担うシーンであっても、4人くらいまでならば「どこに(何に)注目して聴くか」を選びながら楽しめる気がします。

ヒトが集中するために必要な環境

ヒトは集中しているとき、不要な脳活動がなくなっている状態、つまり、必要最小限の脳のネットワークだけを効率的に活動させているのだそうです。普通の状態では、身に迫る危険などを察知しやすいように、脳は目に映るものをすべて処理しようとし、耳に入る音にもすぐに反応しようとし、一方で、集中しているときには、関係のない情報を遮断する機能がはたらきます。ふと気がつくと、「周りの音が一切聞こえていなかった!」となる、あの現象です。

弦楽四重奏は全員が「木に張った弦を毛でこすり」ます。すなわち、視覚や音色の面である種の統一感があります。そのため、見た目が違う・楽器が違うなどのさまざまな情報にあまり気を取られることなく(違うのも楽しいのですが!)、作品に込められた音そのもの——たとえば、音の高低や強弱など

の表現に集中して鑑賞するのに向いている編成といえそうです。このとてもシビアな環境というのも、弦楽四重奏の醍醐味の一つです。弦楽四重奏曲のなかには、「作曲家の内省的な部分が表れている」「個人的な試金石として作られた」と評されるものが多数存在しますが、こうした研ぎ澄まされたツールだからこそ、作曲家にとっても内なる面を吐露したり腕前を試したりする機会となるのでしょう。そうして、たくさんの傑作が生み出され、やがてクラシック音楽の一時代を築き上げるに至ったわけです。

弦楽四重奏の魅力に たっぷり浸れる演奏会

7月19日に開催される水戸芸術館専属楽団「カルテット AT 水戸 第3回演奏会」でも、数々の傑作が取り上げられます。ハイドンの弦楽四重奏曲第38番は「ロシア四重奏曲」と呼ばれる全6曲からなる作品33の弦楽四重奏曲集のうちの1曲で、ニックネームは〈冗談〉。曲が終わりそうで終わらない……と見せかけて半端なところで突然終わってしまう、というユーモラスな曲です。「ロシア四重奏曲」には他にも〈鳥〉などのニックネームをもつ作品が収められていますが、それら6曲の中から今回選ばれたのはこの曲です。古典派の祖・ハイドンの作品らしく音の数も多すぎず少なすぎず、「どこに注目して聴くか」がわかりやすく聴き取れる書法で、「何が〈冗談〉なのか」も一聴瞭然(?)です。

ロシアの現代作曲家レーラ・アウエルバッハによる弦楽四重奏曲第3番〈セテラ・デサント〉は、まさしく作曲家の内なる思考を映し出しています。「だから私はあなたなしでは生きていけない……」「平和を望むなら戦いに備えよ」などのラテン語による哲学的な8つの

ソネットが添えられた本作。弦楽四重奏のもつ研ぎ澄まされたシビアな環境をあえて作曲家が選んだと推察され、その深淵な精神世界に触れることができるでしょう。

ベートーヴェンの〈ラズモフスキー第1番〉は、ベートーヴェン自身が作曲の新しい方向性を見出すきっかけになったともいえる創作中期の大作です。ハイドンやモーツァルトといった先輩たちの弦楽四重奏曲とは違うテイストを追求し、独自の作風を確立しようと模索するなかで生まれました。本作は“規模感”が破格です。古典派の弦楽四重奏曲には、大体の型が懷石料理のように決まっていますが(たとえば、第1楽章にソナタ形式、第2楽章にアリア、第3楽章にメヌエット、第4楽章にロンドといった具合に)、ベートーヴェンは本作の全部の楽章をソナタ形式で作曲しました。もはや「4」楽章というよりは、「1+1+1+1」曲のようにも思える超弩級の作品で、弦楽四重奏のもつポテンシャルの限界に「4±1」を超えて挑むようなシーンも数多くありますから、聴くほうも弾くほうも大変です。

本稿で弦楽四重奏にご関心をお寄せくださった皆様、水戸芸術館専属楽団・カルテット AT 水戸の活躍をどうぞお聴き逃しなく!

■公演情報

カルテット AT 水戸 第3回演奏会

2025.7.19(土) 13:30開場 14:00開演
全席指定
一般¥4,500、U-25(25歳以下)¥1,500

●出演

川崎洋介、西野ゆか(以上ヴァイオリン)、
柳瀬省太(ヴィオラ)、辻本 玲(チェロ)

●曲目

ハイドン:弦楽四重奏曲 第38番 変ホ長調
作品33の2(冗談)

アウエルバッハ:弦楽四重奏曲 第3番
(セテラ・デサント)

ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第7番 へ長調
作品59の1
(ラズモフスキー 第1番)

水戸市民会館に”天使の歌声”がやってくる!

ウィーン少年合唱団～その歴史と魅力

文：関根哲也



世界の数ある少年(少女)合唱団の中でも屈指の伝統と抜群の人気を誇るウィーン少年合唱団。20世紀の大指揮者アルトゥーロ・トスカニーニが”天使の歌声”と評したその清澄な歌声は、世界中の聴衆から愛されています。日本にも熱心なファンは多く、最近では毎年のように来日していますが、今年は1955年の初来日からちょうど70年を迎えるという記念の年にあたります。

ウィーン少年合唱団の歴史

ウィーン少年合唱団が誕生したのは1498年。神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世によって創設された礼拝堂少年聖歌隊がその前身です。マクシミリアン1世はインスブルックで政治を行っていた頃、当地の教会で歌っていたヴィルテン少年合唱団を気に入り、ウィーンに移る際、ヴィルテン少年合唱団のメン

バーを連れて行って(言わば、引き抜いて)、新たに聖歌隊を編成したのです。

以来400年以上にわたって、ウィーンの少年聖歌隊はハプスブルクの宮廷に所属し、礼拝堂のミサで歌うことを任務としてきました。その長い歴史の間には、ハイドン、シューベルト、ブルックナーといった大作曲家たちが、自ら少年聖歌隊で歌ったり、あるいはオルガニストとして共に活動したり、ということもありました。

1918年、大きな転機が訪れます。第1次世界大戦でハプスブルク王朝(オーストリア=ハンガリー二重帝国)が崩壊。少年聖歌隊も解散を余儀なくされます。この一大危機を救ったのが、1912年から宮廷で働いていたヨーゼフ・シュニット神父です。経済学者でもあったシュニット神父は、私財をなげうって少年聖歌隊の存続を

画策し、1924年、民営の「ウィーン少年合唱団」として活動を再開させました。この時、それまでの詰襟からセーラー服へと制服も変更されました。

また、歌うレパートリーも、教会音楽の枠を飛び出し、クラシックの合唱作品、世界各国の愛唱歌まで一気に拡大しました。最近では、ウィーンならではのワルツ、ポルカはもちろん、ジャズや映画音楽などにも挑戦しています。

団員たちの日常

ウィーン少年合唱団には現在、10歳から14歳まで約100名が在籍しています。団員たちは、ハイドン、モーツァルト、シューベルト、ブルックナーという、ウィーンや合唱団にゆかりのある作曲家の名前が付いた4組のグループに分けられ、世界中に演奏旅行に出かけています。今回来日するのはモー

ツァルト組の24名(カペルマイスター: マヌエル・フーバー)です。

さて、団員たちはどのような日常を送っているのでしょうか。その生活を少しのぞいてみましょう。

まず、ウィーン少年合唱団は全寮制の私立学校の形を取っていて、団員たちはウィーンのアウガルテン宮殿(ウィーン旧市街地の北部にある館と庭園)で生活を送り、勉強し、コーラスの練習もしています。

彼らの基本的なタイム・テーブルを見てみましょう。

基本的な1日のタイム・テーブル

6:45	準備を整え、食堂で朝食
7:30~10:50	学校で一般教科の授業 (9:00過ぎ 食堂でおやつ)
11:00~13:00	コーラスの練習
13:00~14:30	食堂で昼食。 その後、自由時間
14:30~17:50	授業。 合間に各自ヴォイス トレーナーによる 個人レッスン (16:00過ぎ 食堂でおやつ)
18:00	夕食。その後は自由時間
21:00	寮の部屋に戻り、 21:30消灯

(招聘元ジャパン・アーツのウェブサイトより)

かなりハードな学生生活と言えそうです。1つのグループにつき、約3ヶ月間は海外に演奏旅行に出かけるため、本拠地アウガルテンに滞在している間に集中して勉学のカリキュラムを進める必要がある、というわけです。

歌う方では、幼いながらプロのアーティストとしてのしっかりとした自覚も持っています。喉をケアし、炭酸飲料や甘いものはなるべく控えるなど、コンディションの維持にも厳重に注意を払っています。

一方で、休み時間ともなれば、皆でにぎやかに庭へ出て、サッカーなどに興じます。最近はスケートボードも流

行っているそうです。ウィーン少年合唱団の団員とは言っても、遊んでいる姿は、元気溢れる普通の子どもたちとあまり変わらないのでしょう。

ウィーン少年合唱団に入団するためには、オーディションを受ける必要があります。音楽的な才能だけでなく、多くの仲間と時間を共にするための協調性や、ハードなスケジュールに耐える心身の丈夫さも求められます。現在は多国籍化が進み、日本や韓国などアジアから参加している団員も少なくありません。

創立以来、ずっと変わらない伝統があります。日曜日に行われる礼拝堂でのミサです。国内外の演奏旅行で多忙なウィーン少年合唱団ですが、ハイドン、モーツァルト、シューベルト、ブルックナーの4組のグループのうち必ず1組はウィーンに残り、毎週日曜には礼拝堂に清澄な歌声を響かせています。なお、このミサには一般の人も参加できるそうです。

趣向を凝らしたプログラム

別掲のように、今回のプログラムの全容が発表されました。

軸となるのは、やはりクラシックの曲目です。ヨハン・シュトラウス2世の〈美しく青きドナウ〉、ヨーゼフ・シュトラウス(2世の弟)の〈永遠に!〉では、本場ウィーンの粋を届けてくれることでしょう。加えて、メンデルスゾーンのオラトリオ、フンパーディンクのオペラ、ブリテンの宗教作品といったバラエティーに富んだ曲目を聴かせてくれるのも楽しみです。

映画音楽やミュージカルも彼らの得意とするところ。ディズニーやスタジオジブリの映画、ミュージカル〈キャッツ〉の名ナンバーが歌われます。

さらに、ウィーン少年合唱団のコンサートでいつも素晴らしいと感じるの

は、世界各国の民謡や愛唱歌を幅広くプログラムに入れていることです。今回も、彼らの母国であるオーストリアの民謡〈ハエ狩り〉の後、日本民謡〈ほたるこい〉が歌われます。その他、ヨルダン民謡、スウェーデンの愛唱歌、カナダの労働歌なども……。

ウィーン少年合唱団は、世界文化の親善大使と言えるでしょう。ですが、ご心配なく! 彼らのコンサートはいつも肩肘張らず、リラックスして楽しめます。音楽を心から愛し、楽しんでる彼らの姿と優しい歌声が、客席にいる私たちの心と体を自然とほぐしてくれるのです。平日の開催ですが、有休を取ってでも聴きに行く価値のあるコンサート、と断言します。どうぞお聴き逃しなく。

■公演情報

ウィーン少年合唱団

2025.6.11(水) 13:15開場 14:00開演
全席指定 S席¥6,000、A席¥4,500、
B席¥3,500、U-25(25歳以下)¥2,000

会場:水戸市民会館グロービスホール
(大ホール)

●出演

ウィーン少年合唱団(合唱)
マヌエル・フーバー(カペルマイスター)

●曲目

ヨルダン民謡:海の上で
オーレン:夏の賛歌
リーデル:「いたずらっ子エミル」より〈イダの夏の歌〉
メンデルスゾーン:オラトリオ「エリヤ」より〈目をあげよ〉
フンパーディンク:オペラ「ハンゼルとグレーテル」より〈タペの祈り〉
シュタイアーマルクの牛追い歌:再び雪解けになり始めるころ
J.シュトラウスII世:美しく青きドナウ
岡野真一:ふるさと
久石譲:映画「千と千尋の神隠し」より〈いのちの名前〉
中山晋平:ゴンドラの唄
ジェンキンス:アディエマス(聖なる海の歌声)
バンキエーリ:動物たちの対位法
オーストリア民謡:ハエ狩り
日本民謡:ほたるこい
ジルベルト:アヒル
ロイド・ウェバー:ミュージカル「キャッツ」より
〈ジェニエドッツ〜おぼさん猫〉
ブリテン:「神の子羊を喜べ」より〈わが猫ジェフリーを顧みますれば〉(鼠こそは偉大にして独特な勇気ある生物なり)
ヨーゼフ・シュトラウス:ボルカ(永遠に)
リチャード/ロバート・シャーマン:ディズニー映画「ジャングル・ブック」より〈君のようにになりたい〉
メンケン:ディズニー映画「美女と野獣」より〈美女と野獣〉
カナダの労働歌:ロバに乗りながら

INFORMATION

※以下は4月20日現在の情報です。公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

《5.31(土)発売予定》

■0歳からのわくわくオルガン・コンサート
にぎやか★オルガン
8.11(月・祝)11:00

■新ダヴィッド同盟 第8回演奏会
9.18(木)19:00

■鈴木優人
「J.S.バッハをとりまく音楽のシリーズ」第2回
9.27(土)15:00

《7.26(土)発売予定》

現代ピアノの巨匠たち[リサイタル編]
■内田光子 ピアノ・リサイタル
10.25(土)17:00

■クリスチャン・ツィメルマン
ピアノ・リサイタル
12.14(日)17:00

◎好評発売中

■水戸室内管弦楽団 第116回定期演奏会 ピアノ:ルドルフ・ブッフビンダー
11.1(土)・2(日)両日15:00

6・7月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆ウィーン少年合唱団

6.11(水)14:00 会場:水戸市民会館グロービスホール
料金[全席指定]S席¥6,000/A席¥4,500/B席¥3,500
U-25(25歳以下)¥2,000

◆茨城の名手・名歌手たち 第33回 出演者オーディション
6.28(土)※時間は応募状況により決定

◆カルテット AT 水戸 第3回演奏会

7.19(土)14:00
料金[全席指定]一般¥4,500/U-25(25歳以下)¥1,500

エントランスホール

◆パイプオルガン・プロムナード・コンサート
(入場無料/事前予約不要)

- 6.8(日)12:00~12:30/13:30~14:00 斎藤茉莉奈
- 6.21(土)12:00~12:30/13:30~14:00 山田恵里菜
- 7.5(土)11:30~12:00 高田のぞみ
- 7.26(土)12:00~12:30/13:30~14:00 佐藤謹然

★《第九》コーラス参加者募集！

水戸芸術館では「水戸の街に響け！300人の《第九》」コーラス参加者を募集いたします。
詳しくはウェブサイトから応募要項をご覧ください。
【お問合せ】水戸芸術館音楽部門《第九》係

2025年5月13日発行(第270号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村 晃、関根哲也、篠田大基、角増 柊、根本彩生、高木春佳

発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30~18:00・月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社



編集後記

春は花が咲く季節。最近の休日は、桜を見に行ったり、藤を見に行ったり。タンポポや菜の花までもが咲いていると、普段家から出ない私でもフラッと出かけたくくなります。——春になるとと不審者情報が増えるという都市伝説は、こうやって生まれたのでしょうか(角)

「太鼓の達人」に夢中の息子。曲によっては暗譜で画面を見ずに難しいリズムを叩いている。リアルな楽器にも触れさせたいと思い、「ドン」「カッ」からの連想でウッドブロックをあげてみました。難易度「おに」の(シンコペーテッド・クロック)を聴きたい。(篠)

第37回ミュージック・ベンクラブ音楽賞授賞式が都内であった。小澤征爾前館長のご功績、新ダヴィッド同盟も含む庄司紗矢香さんの活動のほか、吉田秀和初代館長のことも扱った白石雪雷氏のご著書も評価され、水戸芸術館としては大変喜ばしい会となった。(て)

みんなが花粉症に悩まされているこの時期。花粉症か?と思う時もありますが、気のせいだろうとなんとかやり過ごしています(目がかゆい)。今年もあつという間に夏に来るのだろうか。でも私は、冬の次は夏でいいと思っています(笑)(春)

最近、影アナを担当する機会が増えました。本番前に読む練習をしていると他のスタッフからイントネーションのご指摘が…。直接本番でなくてよかった…と一安心。皆さんのお手元に届く頃には、5月の「みんなのクラシック」を担当中。(根)

水戸芸術館の35周年のシーズンを迎えました。吉田秀和氏や小澤征爾氏をはじめ偉大な先人たちの遺志を継いで、エンターテインメントを超えて、生命の核心に触れ、生活の糧となるような芸術体験をご提供できるように、一層努めて参ります。(中)

Lucky FM 茨城放送

「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」

毎週日曜 7:30~8:00

パーソナリティ:石井哲也アナウンサー

出演:音楽部門学芸員(月替わり)

学芸員がおおすすめの曲をご紹介します、クラシックの魅力をお届けする番組です。

▼Lucky FM ウェブサイト

<https://lucky-ibaraki.com/>

▼radiko(ラジコ)でもお聴

きいただけます

<https://radiko.jp/>



好評
放送中!

演劇・美術のイチオシ企画！

ACM劇場

◆ゆうくとマツさんの「かいじんハテナ?」特別公演

7.20(日)11:00/15:00、7.21(月・祝)11:00

原作:舟崎克彦『かいじんハテナ?』(小学館)

脚本・構成・演出:Ukm3

人形デザイン・製作・操作指導:沢別行

出演:ゆうくとマツさん(小林祐介・大内真智)、堀口理恵

料金:おとな¥2,800/こども

(小学生以下)¥1,500

※お得な親子チケットもあります

詳しくは当館Webサイト

(ACM劇場)をご確認ください。



現代美術ギャラリー

◆日比野克彦展

7.19(土)~10.5(日)

【休館日】月曜日(祝日の場合は翌火曜日)

【開場時間】10:00~18:00(入場は17:30まで)

【入場料】一般¥900/団体(20名

以上)¥700 高校生以下/70歳

以上、障害者手帳などをお持ちの

方と付き添いの方1名は無料



日比野克彦(種は船・金沢丸)(2007)
2011年、水戸芸術館広場で展示風景
撮影:加藤健